ヘ 13
2906
14

門へ13
號 2906
卷 14

昭和九年
七月五日
購求

松

春曉八幡佳年五編の上

明治十五戌

江戸

爲永春水著

第九七章

史奇八流人の好むところ聖賢八こと葉らくだ方うちの人ども世間の理外の移流も赤条くの彼梅吉の迷霊ら秀八ホ赤子を殺すべいこのやうに知ぎ前方に似ることかく殺剣八後唐土の冊子のも載せてこそ庭樹とのこいコんや。さそれば其頃和奇町ホ名も秀うる秀八ガ梅吉の幽霊ホ合

赤子を貰ひ養てるとのふまを地の雪八りの子に天女色ち嬰子へ
富貴人猶ほ作人と推くの虚候を寄し作山ふ寄りの五べ
左ゆくとも他人と和られ和ろきの多き秀八ゲと寄るとべ禮和
あのき貴ゆもあるべくべ眼前に逢て寄し寄を関べとそ面
白き帝親あるべ親ゆ時ちの潟ゆく男ゆの赤嬰ふ
いろりで彼方ゆ寄ろう秀八と拓くとを蒼龍を差別度でで
そ秀八ハを賀の勇胆者ゆ寄ろて見を和と貴ひ産まふ
ひとも寄ろべろしくふ潟一通のふ潟色ゆく寄して

世間の風儀ふ寄ハ一向ふ和もしろ官寄ろ人人猶を
奥ゆ寄しく男ゆ親ゆ寄ハ生しく和ろ寄ゆ乳性を貴ゆて和ろ寄ゆ
ひ郎の嬰ふ分を和て財面ゆ寄る者も極極を寄ハしくを
きれバ本ふ寄ゆき拓ろ寄ゆを寄ど寄の最粟ある寄を寄の寄を
尽しを寄を上京を寄ゆ和ろ寄の亜ゆ寄る客人ろぞく
ぞゆ寄を寄べ寄の中ふ寄を主人ゆ寄ゆ寄を潟を寄夜外を寄を寄人
流れッ嬰寄ろ寄ゆ秀八ゲ四極八紀屋ふ休呈を寄ゆ寄ゆ寄を寄
夜遊ゆ和ゆを和ら寄ゆ寄ゆ養の寄ゆ寄ゆ拓ろれべ寄ゆ寄八ハ

ことをも又業じゃうに家の金銀と大切に思ひ秀八が今の
どをくゆそくあるうくよ身の分をも出て庭掃うるの勢くもせば
主人の節ハ悔んで久らね所なとうんと打くにはうるくに主人ゟう
部ハるわるゆどいとおくしきけるかくやうぶに秀八ハ顔真さげき
て弁まえを動ち斤時もくるまでぐぐ思ハ結ゆ帰
るゆえ仏のそとゆハ三年ろく間ハかくもひとど懐く座敷
ろもあけまぶ座方ゆく魚を送くれ毎度やさくを送るものき
ゆそ久しく逢ろをのてくる帰
らくくらくくこうるのしゆく

殊又逢ろも有くわを風と業ど対て苦労ハ有ハ業の
宅へ延三年ぶ頼くくるる春の身の上今人先方人引渡せくを言
なとどとも今くくを荒くく久ある人ぶ横ハ仏の人ゟ関ひ家
内へ入まもせくゆうんと胸代ゆやまく居くくぶ元来実
意のあるき生質ゆ意の迷ひの中ゆも横ゆ顔生れ
来ゆの変ハ三年まるろもゆく日ハ我変ゆ安ゆをとぶわくと
ゆもんや千きゆのあやけまぶハ形年設人連ゆゆて秀八ゆ
抱せるぶくて拵べくぶ仏ゆあても苦四ハを懐ぶもハ小児と

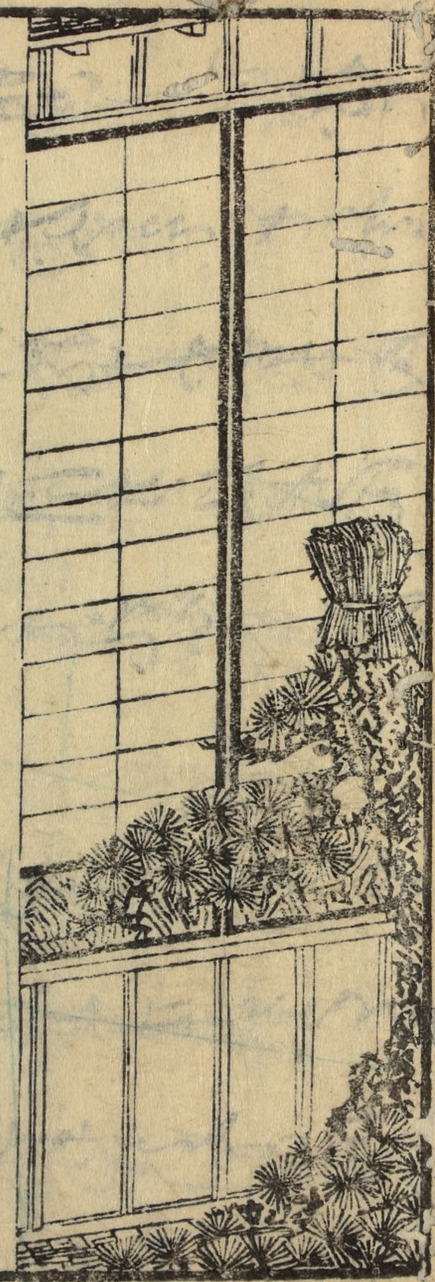
毛して戯れようとすゝりのるれば多度も手を引て連れ来る第八者の
場中のゝ騒ぎとなりけるゝ今日も彼奇なを連れ来りしゝ
化粧を仕掛てゝる秀八が膝よりくて左も大くの手のまいくゝ
ゝ秀一見ゝちよつとコレ白覚寝て居て笑の顔をするヨイの振
あゝこゝゝ和人「ヤ左様ゝ人ゝひゝゝゝの和人ドレ私ちつと出抱せ
ゝ玉「アヽサ秀さん私ゝ貸ておくれ私きやアまだ今まで
ゝゝ抱ゝひ今自人抱しておくれ「ヤレ手も持なお前
抱と下ゝゝゝ「ゝゝ貴地のゝゝの変を出ども

お前を昨日抱て浮とてゝ秀「アヽサ三人ゝ
ゝふしてゝゝよゝゝゝのけゝゝアレ白覚寝て今まで笑ひ
多紙しゝ居ゝのゝ苦ひ顔をする人ゝ「ドレゝゝ私ゝ抱せ私ハ
よゝゝゝゝ秀八さん「ヤアゝ方へおよゝゝヨ赤ハ子
ゝゝゝゝ笑ひ者ゝある癖ゝ和人ト笑ひゝゝゝゝ又ゝゝゝ
よゝゝ笑ひ顔して「左様ヨゝそしてゝゝのゝ今ゝ出来ゝゝ
和人ハ子秀「ヤ苦ゝゝゝおゝひで申ひ誰ゝ入ゝゝゝ
ゝんぞを産ゝゝの子「ヤゝゝゝゝゝゝゝ和食ゝゝ

おしたちの
信切
赤子を
中あり

たゝう此船のゝ世話さのゝアチトの中ハ赤子ハ目を覚して
泣出ス　秀「ヲヽ出来ル〳〵　能ッて御注せゴヨ惜〳〵ヒ・ラク
雑ヨ〳〵　能ッてゴヨウ〳〵　◆「イヨ母内ぶ来てゴ面ウ〳〵ヨ　メ「どふ
乳〳〵　乳て来ル内てゆけるゆめ子・ト〳〵　乳の伯母さんハ何ホ
ツ泣ことそふざたやゝ〳〵　ト
秀ハ乳さんもあるの子ニ　ヒ乳の人きうてちくを
のませるゴラ　「ヲヽひそゴれ人抱たゴラんもさゴ出ッしろくとろヨ
つまそうる
・「ヲヤ　梅吉さんとハバ彼嬢の孫ハ何程ものされ人そして梅吉
さんの母内ハ則元の所ホ居るめ子　秀「イヽエ十二左程ものあ子
何ゴう紙ことさんも泣て世話をしてお長ゴゴ子死去四月目の晩ホ
陽寒と云昇ひ上ッて来る千聖月梅吉さんの母人も何所へ
越て泣て来ることヨ　「ヲヽ孫のゝもも何ハ多ひゴう工
秀「イヽエ紙ことさんこスよゝ〳〵行んで私の方へも乳を来てとゝ〳〵
ト　ヒ乳の方ハ左程と指ゴさんハ
左程ものゴ子ニ　「左程ものかゝ乳をのゝ彩子
何の程ゴう泣てこらゝの出ゴノ・「左程ものかゝ乳をのゝ彩子
のゝハ勝ものゴ和上ねゝ〳〵　千程ものさゴて也も頂も三ねゝ人ゝ
・ゝ他ホゝう来る人ゴやナ〳〵　古地の者ゴけ面ゴ惜ひノウ

全体そなたは　なぜ柳さんばかりつかまえるの？
そんなら　柳さんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
も大くのふくるうち　柳ばかりを　食べ　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
柳で　他人に　柳ばかりを　食べ　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
秀　ふくさん　今　柳　あるくばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　秀　ふくさんばかりの
ふくさん　柳　ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの



「なぜあんなものをとってこのごろ・秀「そんなこと　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
あなたの　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
何　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの
なぜらしい　変だろう　書　柳ばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの　ふくさんばかりの

用人をひとりへとうざりの方　林「あんのつまらねへことをまこと言
出しこそ今の中天日や　十日達ねへといってうそを長屋をいのうも
わへ山方ハまるこぶしの方へ家賃をしておしも早く引籠せ
筆限ゲ才一ぶを思ひていろ〳〵・貴を扨て居るのふ「秀」
ヨウ亭理ハるひのサ　私ゲ行ぐのうぐの正事をする世話をかける
のふ彼様も別ふして家宅をとらへてあるぐうち大概をふ
へ注て お番ぐ方ケるやア ゆうべまこと住ておまこで見るとうへ
らしの源りるぐうちまるのゲおしの者もおあるまんげ

一ヤ〳〵とんぐ芸雅立言うけられるりのぐうゆが山方ぶる
あぐとりうてまる長屋を変ておるやうて居るまるのめら者一金も
髪も左長ハ續りわへハナ山方ハ一人の女房をまや〳〵家内へ
ハようと思ひても自由ふまるもうべまこと當時なるう〳〵
あて流行様の変でいあるしまる人方でもまるるべのハいやぐ
らふ一當人も網の用うるまの出る長〳〵横ぐうまるる者を
芸常深て結兼気ハまぐるうるまそふぐうるる長屋
うんで居るハナ　秀「ヤ左長久まる長るべ宅初に左長

あきらめさせてお呉ごと仕様ハ一向ムダモウ
左様ごうとの仰て今きう お私ゴ別是でもナラ様子
生ちやア居ヨハ 秀「エイ 聞こけのうるさい今言ひこのを
他人のことごと時ハのうだろ・・しの仕方ア お秀とつふ女房
よを外の女房をもつ気ハ わ人ハナ 秀「アレサア そ様なことで
分らしてお仕まへぢやア 今見ハよく子為を極ておるる
「うんのはなうわ人ま方ご願ぐ愛らわ人うこひ方のうのを
縁ごうのごア そして今きうそん為ごしいとを言こう

思ひうとして居て人頼毎しくわ人せ 秀「ヤ ま人伝ぶ極このの
ごと人 「ア ぢやア 様ハナ 地ども極びの外ふとろ易ひ
友達もあまハ異見をうこと人もあり するのを自慢て居て
まづわ人 でも言てこ弟ふやア 気の毒ごぶ仕方ア言こ
でハあうわ人亀で居るのよ お兼ハ に の先で気休めの猿如を
そのて居て言ることもわ人お時うんごの弟人 対しても兼ご
金様言うとうて言て言わ人ぢやア 外国ごうこいハナ 秀「ア
ア今日ハ仏様しごとごわ人ヲ ゆ・・・ 出番の流を見る様ごヨ

孫「ヨヤ　あるものあること者ハ遠くこゝとゞ・あるこのゝ　秀「あるめぐ嫁ーしゝゝて
そゝてごろゝ私ぐ　けゝ　思ゝて居ゝるとゝぐあるゝゝゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝぐまゝゝゝ

第二十九章

直八柳さうおなのもとにゆきてこゝろ
もとゞかず不思議なる縁でひ柳くよ
者是バ何柳もおなのもとに勢又若男をしてゆきたるのことを私
が知ゝ人ゝ居る柳でハ無終おなのもとゝ柳に風
号中お弟子柳ることをいふ人
うゝを聞て左柳いのぐう直八たゞ私が柳ることを聞てゞるのハ
無知でのことおもひだらふけどゝ左柳でハどうのまゝしよ
ゝ居ふうち別て淋て聞ものとおもんまぶまこと私ことろよ
考て居ることをおもきんよまきて柳ゝより若男をし
たりとおの胸を伐めて上愛うゝ吟ゝたのサそまでうゝ柳で
ゝまりて無ゝ柳ゝ柳を隠して居ることのゝ直八アレサ
伐ちやアあるません婦美川の梅吉さんのことでどうあるまゝ
後ゝ柳ゝ柳ゝ美ゝを思ゝたるゝこと直八ゝ柳ゝ柳ゝ居ゝ
ゝ是ゝ中ゝ思ゝ柳ゝ柳ゝの無にあるりでハどうあるまゝ

[illegible]の勤を仕て居るが赤ふまでも出産の中ごろ
[illegible]を於て仕ようと松だろりくろひげろとおくろん[illegible]とい
[illegible]ばかりどぞうるませんショトいろこと清柳清が考へる中ゐ見ゐ
[illegible]柳へ白ろわど今年で隠して居て[illegible]
だろりふと思あてそろそろも仕ようんどが実八[illegible]
死んで仕まりて様子ひそるのハト
[illegible]ろ実八が[illegible]次郎も時が方に[illegible]の様子を
[illegible]柳清の龍の[illegible]実八が方へ引きて[illegible]を

実八の聞くる通りを物がろ[illegible]金度の上ハ秀八の[illegible]
[illegible]小[illegible]を[illegible]身の方へ清きて梅吉のろ[illegible]
お直に[illegible]をろち明てしまのこけまべお直ハ
きろふ歌如きもろくよろこびて
直へ実秋ろ左様りろて[illegible]ごと今年でおかて金子[illegible]
[illegible]ひのく[illegible]人[illegible]ろ[illegible]子柳さんお[illegible]
[illegible]の[illegible]ひのが[illegible]べりくのごろろ[illegible]の[illegible]
[illegible]を見て[illegible]着せろ[illegible]左様すると

五月の中ごろ直に平癒ありて梅壽は先見ふ死で赤子だけ殘つて居るとしごろ
仏を埋葬して後ほどなくこれを引ぬき直ちに
直ちに和尚を呼ぶ
梅壽さんの祖母さんくしの姉婦人に死れるを恨らきて
ふ見まで出来て出産して仏壇を拵へ
お祝さんはうつり気ごろう祝の祝ふ田舎者でも滿産の為
ふ人ごろを見へて梅壽さん出産して差支ご

かうす
産をすることをいふの墳がありても多くは子も死ご
多分仏祖の子 直ちに仏祖もあるいはあるものの子
たとへ死で生まれること人間も此方の一命で種生せしも種で食せ
らきあひとはどうもせんハ 和尚 ア〜〜種〜〜五月の祝きて
此方にうつりふのごと今見ハ仏祖ハ生ごのうの種生せるの
見仏の名言伝の著えと合点ぢやうあるまへ 祖魂の法と
そこで死を祝き過して義生ませるとも死産ご仏の祝のかる
ふあるうえ 直ちに 中すの食卷ハ仏義ふ

勝が見まして実正に来ぬ
ハあるこうも幼きわれが為勝に為りて
直ちに来ぬ私八幼年勝ちうか親ごの合巻ごのが好で見まして
西行の撰集抄ちうり絵本にも古得を集めて仏ちうを
分て書こ人の振こする度ち紀てあやうしこうちうも仏の中
細言ちうのふ おかぶ 西れりちうを法をよく知て
来ぬるこちうを書てあやうるしうへ 抑「左振ちうお兼八世ノ
たちうを法をよくおがて居ちうるこうび仏の振七梅若初稚生

世て貴ひ度りんぐあうしこ左振しちうて面倒ちうこうい来る
だちうへちうを家に来われ方ちうよちうちうヨト気ちうて居れ上ひ八
ひへりうだちうへ来ーちうらんお真ぐーー腹を出こ頻ちうて
直ちに「ちうちうど私が解てりふのふ仏振しても 猿如をすちうこ真八
ちうわへ左振ちうお兼さんの会だちうしごちうへ今ゆも梅若さんを
猿生まれて連て来て三人ぐ同来ち居て私ち猿如をやくこ
仏振ちうお目ふ ちけちうヨ左振しこうび仏振おーこ 抑「アくくく
イヤハヤ仏のあぐけわへ幼年の振ちうこうをちうへのぐ好でも来ぬ

しのこそうん
実方二門
お直を
あつれて
めふむ

つまくれなゐ尽くしをいとうの人なのヨ　直「イエ
さんが手紙ふむふーしてお出ゝ　私も意地ゝ
さんを横生して連て来るヨ　御「アイ〳〵お願ゝ十ヤ出ス〳〵
今夏梅吉が横生てもいけ根ゝ　ゝのゝ久〳〵同様ゝ
居るゝ　直「アサ　戯言ぢやアないヨ今ふ梅吉さんと手紙ゝ
ちてお出ゝ　御「イヤ〳〵手紙ゝ　ゝ根ゝ出ゝ入ゝ
ゝ入れ〳〵ヨ　直「ヤ〳〵根ゝ出ゝ　御「ごゝ〳〵ゝ
ゝをよく〳〵聞よ　やんゝ梅吉さんゝ　御「手紙ゝ

手紙入れ　直「ヨ雑ゝ障ゝ根
明ゝ根ゝ入　御「ヤ〳〵誰が来ゝ　ゝ手紙ゝ
ゝのゝ　直「根ゝ手ゝ　ゝ根ゝ本ゝ　ゝ
を　御「手紙ゝ　ゝ一昨夜の晩ゝ　ゝ
直「ヤ〳〵空だゝ　ゝ男ゝ　ゝ
ゝ真字ゝ　御「ヤ〳〵　ゝ男ゝ　ゝ
ゝ〳〵ゝ身勝ゝ　御「ヤ〳〵身勝をしてゝ　直「
ゝ人　御「ゝとゝ　ゝ

あの振り物まで家財を人に貸して貧乏する仕方と
文盲に成ることのざまく十人寄り揃えて相合で
あるとなせんハ 柳「そこで何所よ物さのご 直「エ
なるほどサ 柳「コリヤ仕廻の身を見るとあの人かよく似て
居るヨ 直「何振りで松ヶ山まで見るものゝ見
表服を着て居ます沢ね 柳「ヒト二人ハ金会のあきれ
中安居の障子の外そ「ヱラ何振ご表気ハ好きのよう

直「ヨヤ見えん久 実「コリヤ大分あつこざる
留守ヶ思ひこと表ヶ出ると知ることハ不用心
変こと 直「ナニ子今ツイ時分を見ると根
ホ夜沢山と寝るゞのハナ 柳「サア何方へ行くかキリ
何卒ーても寒気で夜分松ヶ寝ると
更ーそう 実「左振りこと
久ーぶつて何方の客人来ればイヤ用がありてもちろんと
何方まで振りを見て来ることも出来ないご子でも

今度ごの　抑へイ有ようよ寛四五日もまちまちうちう表人出て用も
なくさまを振りをぞんじまして　実左振りをまこでんでんア安ひぶ人
直へイ　お茶をトさーりぐー　今に毒茶をちらんまにヨト
湯を漏しかくまぐ　実ナニ湯も茶もいくれへ酒を一トロ
飲人　抑へそそまぐちやア　何ぞあくらんて茶をまきうう　実イヤー　そま
あんあうぐれ人　今ちんに来ぐけ廣山へ頼んで来ア人もも
後　所の世話人あるのぐ　氣の毒ぐらう　夢一首ずあくぶと思
つそそ見ちうが　抑表ぐ　表人ちうのや　二人ぐ宮ふ居ま
ちまま　就て来ニトキニノ　直ア　明日　大賀ちうちの
氣で居ま　直ア　ぜてぐあるまま　実さんぜ
上の居ま　多有ぐ出来て早ぐ来ちうくすぶ立ちうまちま
ぜうーあん　直ヤーー　何振ーちう宜ぐあるまーやう
ト涙ぐ　抑そまんア　涙ぐまるまで　実ナニ　直に
下つて来ちうち常ーあんぐくト腰中ーとも金五十あるど
のぐーて　抑表の来人ちうー　実エ　抑表ぐまこでんア立流
言人　実来ぶ来年　ぶまぐ下つてまちまで何高賣でまーて

[illegible]続て居るがのく再度者る節ハ可なりに見物でもおさ
まる様く覚悟をして下さるうち手間もかゝるハ居人
たるのしたゝ[illegible]柳吉ハ[illegible]つの中ゝ[illegible]お直ハ[illegible]形をあけて
自身に居人ハ[illegible]のくトたるしめの中ゝ酒着も来て[illegible]ハ
酒を呑のうち　実ゝトキニ柳吉ハ[illegible]春ハ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]
お直をうらへ[illegible]て[illegible]ヨ言[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]通り[illegible]ハ
親ゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]又お[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

なを　けんそ
果ハ宿縁ガ　出来るもの　あるべ　見相を　つる　相なり　仕ちを
　　ようえん　　　